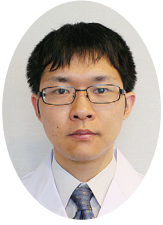
パーキンソン症状について
～早期診断、早期治療のために～



社会医療法人全仁会　倉敷平成病院
神経内科　角田慶一郎

神経内科が担当している病気の一つに、パーキンソン病という病気があり、パーキンソン病で見られる症状をパーキンソン症状、そのような症状が出る病気をまとめてパーキンソン症候群（ここではパーキンソン病を含む広義の意味で）と呼びます。今回は紙面の関係上、パーキンソン症状とはどういったものか、について御紹介したいと思います。

●振戦

振戦とは、主に手に現れる震えです。緊張すると出やすいです。病気によって、左右どちらかから出る場合と、両方ほぼ同時に出る場合があります。また、足や顔に出ることもあります。安静時に出るのか、何かをしようとしている時に出るのか、でも疑う病気が変わってきます。例えば、パーキンソン病などでは安静時に振戦が出現します。逆に、他の症状が無く、安静時には手がそんなに震えないのに水の入ったコップを持つと極端に手が震える、という場合は本態性振戦という別の病気が疑われ、治療法も全く異なります。

●すくみ足、小刻み歩行、姿勢反射障害

これらは歩行に関する症状です。歩き始めの一歩目の足が出ず、歩き始めても一歩一歩が小股・すり足になります。上半身が前かがみになり腕を振らなくなり、方向転換の際など容易にバランスを崩し転倒するようになります。

●無動

無動とは、動き始めるまでに時間がかかったり、動作が非常にゆっくりになったりすることを指します。表情筋の動きが乏しくなるせいで無表情になることを仮面様顔貌と呼びます。また、小声になったり書字が小さくなったりもします。

●筋強剛

筋強剛は本人に自覚無く、傍から見ても分からない症状で、診察の際に確認します。具体的には、患者さん本人にはできるだけ力を抜いて頂いた状態で首や手足を動かすと、抵抗感を感じるというものです。

●自律神経症状

パーキンソン症候群では自律神経症状が出現することがあります。具体的には、便秘や起立性低血圧、神経因性膀胱などで、便秘が最も頻度が多いです。起立性低血圧の症状はいわゆる立ちくらみですが、症状が強ければ失神する場合もあります。神経因性膀胱とは尿を出しにくくなったり、頻尿になったりします。これらの症状はパーキンソン症候群以外でも生じうるので、他に原因が無いか詳しい検査が必要となります。

●その他

嗅覚障害、うつ傾向、認知機能障害、睡眠障害などの症状が見られることがあります。

パーキンソン症候群が疑われる際には、パーキンソン症状及びそれ以外の症状の有無、受診までの経過、既往歴、家族歴などを詳細に確認して診断していきます。いつ頃からどういった症状が出始めたか、という情報があれば非常に助かります。また、画像診断が有用な場合もあります。ただ、症状が非常に軽い場合や、逆に重すぎる場合、それまでの経過が不明な場合などは診断がすぐにはつけられないこともあります。

パーキンソン病を始めとしてパーキンソン症候群には特定疾患（いわゆる難病）に指定されているものがあり、それらは今のところ根治できません。しかし、多くの治療薬が開発されており、その中でも特にパーキンソン病は早期診断、早期治療開始により症状が著明に改善しその後の進行も遅くなるとされています。また、その他の疾患の場合でも脳外科などで治療可能なものや、薬やリハビリテーションにより症状を和らげることが可能な場合が多くあります。今回取り上げたような症状に気づかれましたら、ぜひ一度病院を受診してみてください。